

令和4年度生息域内における家族移送及び放鳥手法（案）について

1. 移送家族数の決定

野生復帰家族数は那須どうぶつ王国から最大3家族、茶臼山動物園から最大2家族と雄1個体とし、移送前1週間をめぐりに事前チェック項目をクリアできた家族（個体）について野生復帰を行う。事前チェック項目でも記載したが、各検査の結果だけでなく、家族の状態や雛の数なども含めて専門家と相談し最終的な判断を行う。

2. 移送ケース

移送については、令和3年度の移送結果を踏まえて1家族ずつ段ボールに入れて実施する。また、親は単独、雛は最大3羽までを1つのネットに入れる。段ボール内は親と雛をアクリル板で仕切ってそれぞれのネットを1つの仕切り内に入れる。雄個体は単独として別の段ボールで移送する。よって、最終的にヘリコプターに搭載する移送箱数は最大6個となる。

また、段ボール内の温度が上昇しすぎないように適切な場所に温度計を設置して、移送開始時から箱内に保冷剤を入れる。25℃を目安に保冷剤を追加投入するなどして温度を調節する。

3. 移送手順

（1）移送時期

8月上旬。天候不順を想定し、連続して複数の候補日を用意。

既にケージ保護を実施している中央アルプス生まれの家族については、動物園から移送する前に放鳥する。

（2）移送経路

那須どうぶつ王国からはヘリコプターによる空輸、茶臼山動物園からは車による陸送でライチョウ家族の移送をする。那須どうぶつ王国を出発したヘリコプターは黒川平にて一時着陸した後、茶臼山動物園から陸送してきた家族をへ

リコプターに載せる。黒川平ですべての野生復帰家族をヘリコプターに収容した後、駒ケ岳へ移送する。駒ケ岳においてはこれまで実施したヘリコプターによる移送と同様に頂上山荘脇の登山道に着陸する。

1日で移送を完了させるため、確実に実施できる日の判断は慎重に行う。万が一、黒川平までライチョウを運んだものの天候悪化等により一時的に黒川平で停滞することも考慮し、ライチョウ家族を待機させられる車両を用意しておく。天候変化のリスクを最小にするために早朝から移送を開始する。

なお、茶臼山動物園から駒ケ岳までの所要時間は陸送を含めて概ね130分程度、那須どうぶつ王国から駒ケ岳までの所要時間は概ね100分程度を予定している。

(3) 移送体制

各園から黒川平までの移送に関しては家族を飼育している各園及び日本動物園水族館協会が担当し、黒川平から高山帯への移送は環境省が担当する。ただし、ヘリコプター離着陸場所には環境省や請負業者職員を配置して対



図1. 令和4年度野生復帰個体の移送計画模式図



図2. 各園からの移送経路

応する。

(4) 高山帯到着後の対応

到着した家族はそれぞれ別のケージに搬入し、雄についても単独でケージへ搬入する。頂上山荘に設置するケージ数は最大4個であるため、2家族ないしは1家族及び雄1羽については天狗山荘に設置したケージへ30分程度かけて人の手で移送する。ただし、動物園から駒ヶ岳への移送中に天狗山荘へ移送する予定の個体の体調が悪化していた場合等、高山帯での移送に耐えられないと判断された際には専門家との協議の上で緊急的に頂上山荘周辺に設置した小型移動式ケージへ搬入する等の対応も検討する。また、雄個体については天狗山荘への移送や、ケージでの収容が困難と判断された場合には、移送直後に放鳥することも検討する。移送直後の対応については個体の状態に依存するため、現地で待機している専門家と十分に協議した上で幅広い対応をする。



図3. 中央アルプスにおけるヘリコプター到着位置

5. 高山帯移送後の野生馴化

高山帯現地での野生馴化（後期野生馴化）については、1週間程度実施する。なお、移送した飼育家族についてすべての餌が高山植物になることがないよう、飼育環境で給餌されていたペレット飼料や野菜について一定程度給餌する。一方

で、現地環境への馴化、腸内細菌叢をより野生型へ近づけるためには、より多くの高山植物を食べることが重要な項目であり、散歩の時間をなるべく長くするなど自由に高山植物を採餌する時間を増やすことやケージ内に高山植物を用意するなどの対応を行う。

高山帯現地での馴化期間は概ね1週間とするが、それぞれの家族や各個体の状況を注意深く観察し、専門家の意見により放鳥のタイミングを諮る。なお、放鳥までに雛には野生個体と同様に1つずつ簡易的な足輪を装着し、9月以降のモニタリングで再発見された際には捕獲して成鳥と同様に左右2こずつ足輪を装着する。また、資料3-6で示した性別判定を実施するために放鳥までに各個体から羽毛1枚程度をそれぞれ採取する。

6. 放鳥後のモニタリング調査

野生復帰家族のモニタリングについては、前述した中央アルプスにおける野生個体のモニタリングと合わせて実施する。野生復帰家族についてもVHF機能付き発信器装着対象となるため、個体の状況によっては雌親に発信器を装着してから放鳥する。